

狩俣の神歌 fusa (草)

ma:dzi-mara マーズマラ

本永 清 (元宮古島市総合博物館協議会会長)

宮古島の狩俣ではかつて、旧暦 10 月から同 12 月にかけて、祖神祭 uja:n (親神) を 5 回に分けて行っていた。初回を dzi:-bu-bana (杖の端=杖のつき始め)、2 回目を idasi-kam (出し神=新神女の選出)、3 回目を matuga-ja: (同名の家での行事)、4 回目を a:bu-ga: (同名の地での行事)、5 回目を tudja:gi (閉じ明け=終回) と呼んだ。さて、その祖神祭 uja:n の 2 回目の行事 idasi-kam の時、聖林 ni-sima (根島) に籠もっていた神女たちが juna:n (夕神) と称して、人里 dzuni (宗根=国)、別称 nja:ku (宮古) に降りてきて、狩俣第一の拝所 upu-gufu-mutu (大城元) の中庭で輪舞する場面があった。その場面では、神歌 fusa (草) を司る神女 fusa-nu-nusi (草の主) のペアがその輪の中央に立って、七編の fusa を連続して歌い上げていた。この ma:dzi-mara の fusa はその七編のうち、冒頭を飾る一編であった。祖神祭 uja:n では、神女たちがその仕える祖神に成り代わって行動していたことから、同ペアもその仕える祖神 fusa-nu-nusi に成り代わって、つまり同神の化身として、この fusa を歌っていたことになる。本稿では、そうした背景をもって歌われた ma:dzi-mara の fusa を取り上げて、歌詞の解釈を試みる。

以下、読者の理解を助けるために、まず歌詞の大意を記す。そして、歌詞を掲げてその対訳と語注を示し、最後に解説を付す。

なお、本稿で述べることはあくまで私見であり、先行研究など他の解釈を否定するものではない。言うまでもなく、狩俣の神歌 fusa は一般に難解である。各人が多様な意見を自由に出し合う中で、例えばこの ma:dzi-mara の fusa についてもその正しい解釈の糸口が見えてくるであろうとの思いで、本稿を執筆した。

【大意】歌詞は ara-pana (新端=序歌) と呼ばれる前段と神々のストーリーを歌う後段から成る。前段では、祖神 uja:n たちがその居所 ni-sima から一列をなして人里 dzuni、別称 nja:ku に降臨する様子とその降臨の目的を歌う。後段では、母神 ma-dama (真玉) が生んだ七人の子のうち、末娘 ma:dzi-mara が機織りに秀出していたこと、ma:dzi-mara が織った布を求めて下地や平良から買い手が殺到したこと、買い手がその入手した布を胸や首にあててあまりの美しさに驚嘆したこと、ma:dzi-mara の名声が ui (天上界)、nakabi (地上界)、niizja 別称 kanaja (地下界)、そして上記 ni-sima の神々の耳にまで届いたことを歌う。最後に ma:dzi-mara を生んだ両親を称えて歌う。

〔歌 詞〕		〔対 訳〕	
1	kam-ma maki turiru-jo i: kam-ma sima turiru-jo	1	神は マキでは 静まれよ! イー 神は スマでは 静まれよ!
2	ni-sima-kara uri-nna	2	ニスマから 降りる 時には

	uri-dzi-kara uri-nna	ウリズから 降りる 時には
3	baŋ-ga fusa upu-kam kan-nu fusa upu-kam	3 私の フサで 歌われる 大神は 神の フサで 歌われる 大神は
4	mumu fusa-u pusa-n-su jasu fusa-u pusa-n-su	4 百の フサを 欲しさに 八十の フサを 欲しさに
5	usi-na ufi uri-ti-ja nu:i-na nu:ri uri-ti-ja	5 押しに 押し 降りては 乗りに 乗り 降りては
6	kunu dzuni-n uri-ti-ja kunu nja:ku-n uri-ti-ja	6 この ズニに 降りては この ニャークに 降りては
7	urifuri-ti-gara-ja-jo mmjatsimjaki-gara-jo	7 降り 揃ってからよ もう 集まってからはよ

〔語注〕○ma:dzi-mara 女神名。大城家の ma-dama (真玉) という母神が産んだ7人 (8人ともいう) の子供神のうち、末っ子に当たる娘神で、機織りに秀出していたと語り伝えられている。○kam「神」。ここでは祖神祭 uja:n (親神) の時、ni-sima から dzuni、別称 nja:ku に降臨する祖神 uja:n たちを指す。祖神 uja:n の降臨は、全身を草装・木装した神女 uja:n たちによって、儀礼的に演じられる。その際、神女たちは一列をなすと道中、神歌 fusa (草) を歌い続ける。㊦ 狩俣では kam という場合、神であったり、神々であったりする。ここでは、後出の語句などから判断して、神々と解釈するのがよかろう。○-ma 副助詞。～は。-m はわたり音。○maki「牧」。集落の古名。人里。村里。ここでは狩俣集落。㊦ ①伊良部島には maki-nigai (牧の祈願) と称して、古集落跡を周辺集落の住民たちが詣でる祭祀がある。②オモロには古集落を表す「まきよ」の語が見えるが、maki はそれと同根の語であろう。○turiru 動詞 turi (静まる) の命令形。静まれ! 鎮まれ! ○-jo 終助詞。～よ。○i: 囃子詞。以下、各番の同じ位置でくり返される。○sima「島」。①島。離島。②人里。村里。集落。③祖神 uja:n たちの居所、領分。ここでは②。maki の対語。○ni-sima「根島」。根となる島。祖神 uja:n たちの居所、領分。狩俣集落の西隣に広がる聖林一帯を指す。○-kara 格助詞。～から。○uri 動詞 uri (降りる) の連体形。降りる～。降臨する～。○-nna 格助詞。～には。○uri-dzi「降り地」。祖神祭 uja:n の時、神々が降りてくる地。ni-sima の対語。○baŋ「我」。神歌 fusa を司る fusa-nu-nusi (草の主) の自称。ban が通例で、語尾の-ŋ は-n の口蓋化。○-ga 格助詞。～の。○fusa「草」。①植物の草。②神女 uja:n たちが仮装に用いる草冠や手草、杖、草の帯、またはその総称。③祖神祭 uja:n の諸儀礼に伴って神女たちが歌う神歌。④祖神祭 uja:n の輪舞。ここでは③。以下、文脈によって訳し分けることにする。○upu-kam「大神」。聖林 ni-sima から人里 dzuni、別称 nja:ku に一列をなして降りてくる祖神 uja:n たちの尊称。㊦ 祖神 uja:n たちの降臨は、同名の神女 uja:n たちによって儀礼的に表現され、可視化される。その列順は次の通り。①abu-mma (大母)、②na:ma-nu-mju:ni-nusi (仲間の御船主)、③ju:-nu-nusi (世の主)、④midzi-nu-nusi (水の主)、⑤uparudzi (大主)、⑥kanja:-mutu-nu-mma (カニャー元の母)、⑦mandza-mma (万座母)、⑧fusa-nu-nusi (草の主) 2名、⑨無役の uja:n 複数名。○kan「神」。kam に同じ。○-nu 格助詞。～の。○mumu fusa-u pusan-su 数々の神歌 fusa の中に自分の fusa も入れて歌

ってもらいたくて。mumuは「百」。多くの。たくさんの。-uは格助詞。～を。pusan-suは欲しさに。○jasu「八十」。多くの。たくさんの。mumuの対語。○usī-na ufi uri-tija 前に行く祖神 uja:nの背中を後ろから押すようにして降りて。前に行く祖神 uja:nに遅れないように降りて。usīは動詞 usī(押す)の連用形。押し～。-naは格助詞。～に。ufiは動詞 usī(押す)の連用形。押し～。uriは動詞 uri(降りる)の連用形。降り～。-tijaは接続助詞「～て」+副助詞「～は」。○Onu:i-na nu:ri uri-tija 前をゆく祖神 uja:nの背中に乗りかかるようにして降りて。○kunu 近称。この。○dzuni「国」。地域区分を表す語 suniの変化。ここでは狩俣の地、または狩俣集落。㊦ ①従来 suniには「宗根」の漢字を当てているが、これは地域区分を表す「国」の変化であろう。宮古方言では、草を fusa、ssa などと言うように、共通語の k 音は f、s 音に変化する。②仲宗根は「中心となる国」の意であろう。○-n 格助詞。～に。○nja:ku「宮古」。①宮古。宮古島、または宮古諸島。②巨大・超大なものへの喩え。③人々の居住地。人里。村里。集落。④楽園。⑤安心・幸福な生活。⑥自由。⑦わがまま。身勝手。⑧一生。生涯。寿命。⑥人間界。この世。現世。⑦いつまでも。永遠に。永久に。ここでは③。dzuniの対語。○urifuri-ti-gara-jo 動詞 uri(降りる)の連用形 uri(降り～)+動詞 suru:(揃う)の連用形 surui(揃い～)+接続助詞 ti(～て)+接続助詞 kara(～から)+終助詞-jo(～よ)が縮まった形であろう。○mmjatsimjaki 語義不詳。前後の文脈から判断して、ここでは「もう集まってからは」と仮訳を当てた。

8	maja-nu matsi-miga-ja-jo mumu-sa'-nu nusī-za-jo	8	マヤの マツミガはよ 百フサの 主はよ
9	mma-nu-kam mju:pugi-jo jagumi kam mju:pugi-jo	9	ンマヌカムの おかげでよ 畏れ多い 神の おかげでよ
10	jurusa-mai mju:pugi-jo pugasa-mai mju:pugi-jo	10	お許し 下さる おかげでよ お解き 下さる おかげでよ
11	ba-ga ni-futsi u-kui-ju kam-mu dama ma-kui-ju	11	私が 歌い始めた お声を 神の 分の 真声を
12	u-tumu jum tujuma u-siki jum mja:gara	12	お供して 歌って 響もう！ お付き添って 歌って 栄えよう！
13	mumu-fusa-u najurai jasu-fusa-u najurai	13	百フサを 歌って 舞い 八十フサを 歌って 舞い
14	mumu najui najurai jasu najui najurai	14	百の 舞いを 舞い 八十の 舞いを 舞い
15	fusa fumaſi kairai naju pikafi kairai	15	フサを 踏ませてから 帰ろう！ ナユを 引かせてから 帰ろう！

〔語注〕○maja「真屋」。屋号。○matsi-miga 女神名。神歌 fusaを司る役目の女神 fusa-nu-nusiの

異名。[補]fusa-nu-nusi は役名、matsi-miga は実名であろう。○-ja 副助詞。～は。○mumu-sa:「百草」。神歌 mumu-fusa に同じ。○nusi「主」。神歌 fusa の歌い手。歌者。○-za 副助詞。～は。-ja に同じ。-3 はわたり音。○mma-nu-kam「母の神」。母なる神。母神。村立ての神。[補]mma-nu-kam は、狩侯の最高神として、祖神祭 uja:n など各祭祀に関して全権を持つ。祖神 uja:n たちの行動、したがって神女 uja:n たちの行動はすべて、同神の認可のもとに行われるものと村人は考えている。○mju:pugi「お目置きで」。おかげで。狩侯の神歌で見る限り、mju:pugi は mma-nu-kam など上位の神々に対してのみ使う、最高敬語のように見える。○jagumi 畏れ多くも尊い～。○jurusā-māi「許しなさる」。お許しになる。お認めになる。認可なさる。○pugasa-māi「解きなさる」。お解きになる。jurusā-māi に同じ。○ba matsi-miga、つまり fusa-nu-nusi の自称。我。ban (ban) に同じ。○-ga 格助詞。～が。○ni-futsi「根口」。歌い始めた～。[補]futsi-si:「口する」。言う。唱える。歌う。○u-kui「お声」。神歌 fusa のこと。○-ju 格助詞。～を。-u に同じ。-j はわたり音。○-mu 格助詞。～を。-u に同じ。-m はわたり音。○dama「玉」。分け前。取り分。○ma-kui「真声」。u-kui の対語。○u-tumu「お伴」。ここでは、狩侯の村立ての神 mma-nu-kam のお伴をして。○jum「よむ」。①読む。②唱える。③歌う。ここでは③。○tujuma 動詞 tujum (響む) の意志形。響もう。鳴り響こう。栄えよう。○u-siki-sui「お付き添い」。お付き添いの役を賜って。u-tumu の対語。○mja:gara 動詞 mja:gai (伸び上がる) の意志形。伸び上がろう。栄えよう。tujuma の対語。○najurai 動詞 najui (しなやかに舞う) の連用形。しなやかに舞って。ここでは単に「舞って」と対訳を当てた。[補]日本の古語「なよぶ」と同根の語であろう。○fumaji 動詞 fumasi (踏ませる) の連用形。踏ませて。舞わせて。輪舞の足運びに視点を置いた表現。○kaira-i 動詞 kaii (帰る) の意志形。降りてきた ni-sima に帰ろう。○naju 舞い。動詞 najui の名詞化。fusa の対語。○pikaji 動詞 pikasi (引かせる) の連用形。連ねさせて。輪舞の列に視点を置いた表現。

16 upu-gufui ma-dama-ga tu:pitujutu ma-dama-ga	16 ウプグフイの マダマが 遠い 昔の マダマが
17 itsi-nafai fura nasi nana-nafai fura nasi	17 五人の 子を 生んだ。 七人の 子を 生んだ。
18 itsi-ju ara-pja:-nna-jo itsi-zu futasaki-za-jo	18 いちばん はじめにはよ いちばん 最初にはよ
19 mabaruma:ru mmaraji saki-nu fa:-ja mmaraji	19 マバルマールを 産んで 先の 子を 産んで
20 mabaruma:ru tsigi-nna saki-nu fa:-nu tsigi-nna	20 マバルマールの 次には 先の 子の 次には
21 majamado:-ja mmaraji ja:-nu-nusi-za mmaraji	21 マヤマドーを 産んで ヤーヌヌスを 産んで
22 majamatu-ga tsigi-nna	22 マヤマトが 次には

ja: -nu nusī-nu tsīgi-nna	ヤーヌヌスの 次には
23 ju-masaī-za mmarafī	23 ユマサイを 産んで
tujum fa: -ja mmarafī	響む 子を 産んで
24 ju-masaī-ga tsīgi-nna	24 ユマサイの 次には
tujum fa: -nu tsīgi-nna	響む 子の 次には
25 suī-miga-ja mmarafī	25 スイミガを 産んで
kan-nu sa: -ja mmarafī	神の 子を 産んで
26 suī-miga-ga tsīgi-nna	26 スイミガの 次には
kan-nu sa: -nu tsīgi-nna	神の 子の 次には
27 mabaradzi-za mmarafī	27 マバラズを 産んで
kan-nu sa: -ja mmarafī	神の 子を 産んで
28 mabaradzi-ga tsīgi-nna	28 マバラズが 次には
kan-nu sa: -nu tsīgi-nna	神の 子の 次には
29 ma-kanasi-za mmarafī	29 マカナスを 産んで
kan-nu sa: -ja mmarafī	神の 子を 産んで
30 ma-kanasi-ga tsīgi-nna	30 マカナスの 次には
kan-nu sa: -nu tsīgi-nna	神の 子を 次には
31 ma: dzi-mara-ja mmarafī	31 マーズマラを 産んで
ti-masarja: mmarafī	手の 優れた 者を 産んで
32 ma: dzi-mara-ga tsīgi-nna	32 マーズマラの 次には
ti-masarja-nu tsīgi-nna	手の 優れた 者の 次には
33 uru: fu: ru: ji: mti-tiga:	33 産み 下ろして 満ちると
tatami wa: tji mti-tiga:	畳み 終えて 満ちると

〔語注〕○*upu-gufuī*「大城」。屋号。狩俣第一の拝所 *upu-gufu-mutu* (大城元) のこと。㊦ *upu-gufu-mutu* は、かつては人家であったが今は住む人がなく、大城一族の拝所になっているという。○*ma-dama*「真玉」。女神名。狩俣の村立の神話(以下、村立神話と記す)から推する限り、*upu-gufu-mutu* 三代目の神で長男の *upu-gufu-tunu* (大城殿) の妻神のように見えるが、その件については筆者は聞き取りをしていない。○*tu: pītujutu* 語義不詳。「昔響んだ〜」あるいは「昔から名高い〜」の意か。㊦ 稲村賢敷著『宮古島旧記並史歌集解』には、ここは「んきやとよの」とあり、「んきやとよ」に「昔のすぐれた人」の対訳を当てている。○*itsi-nafai* 五人(の)。*itsi* は数字の五。*nafai* は古語「生す」の受け身形だが、共通語にその適訳が無いため、ここでは人数を表す「人」を当てた。○*fura* 子。子供。○*nasī*「生す」。産む。ここでは、前後の文脈から判断して、「生んだ」と対訳を当てた。○*onana-nafai* 七人(の)。○*itsi-ju* 一番。*-j*はわたり音。○*ara-pja:*「新端」。ものの始め。大昔。太初。○*itsi-zu* *itsi-ju* に同じ。*-z*はわたり音。○*futasaki*「二裂け?」。天地が分かれた頃、の意か。*ara-pja:*の対語。

○mabaruma:ru 男神名。母神マダマが生んだ第一子。村立神話では、同神について「マールユブズトユンシュー。五歳で死す。世の神。五穀の神。」と語る(拙論「三分観の一考察」を参照)。○mmarajī 「産まらして」。産んで。㊦ 母親が子を産む行為は、その子にとってはいわゆる受け身であると考えるのであろう。○saki-nu fa: 「先の子」。最初の子。長子。mabaruma:ru のこと。○tsigī 次。○majamado: 男神名。母神マダマが生んだ第二子。㊦ 村立神話では、同神について「マヤマブクイ。兄神が死んだので、かわりに家を相続した。」と語る(同上)。○ja:-nu-nusi 「家の主」。家を相続した神。majamado: に同じ。㊦ ja:-nu-nusi という呼名の別神がいるが、同神は upu-gufu-tunu (前出) の妹神で、一生を独身で通したという(同上)。○majamatu majamado: に同じ。○ju-masai 「世勝り」。男神名。母神マダマが生んだ第三子。世に秀出た者。㊦ 村立神話では、同神について「門番の神として、ミヤークへ悪霊が入るのを防いでいる。」と語る(同上)。○tujum fa: 豊めく子。将来の成功が約束された子。○sui-miga 女神名。母神マダマが生んだ第五子。㊦ 村立神話では、同神について「スウイミガ。五歳で死す。不詳。」と語る(同上)。なお、同神話では「第四子に神歌を司るマーズミガを生んだ。」という趣旨のことを語るが、この fusa ではそのことは歌われていない。○kan-nu sa: 「神の子」。短命の子。早死にした子。㊦ sa: は子の意。例えば、aka-sa (庶子) という語がある。○mabaradzi 女神名。母神マダマが生んだ第六子。㊦ 村立神話では、同神について「ママラズ。五歳で死す。不詳。」と語る(同上)。○ma-kanasi 女神名。母神マダマが生んだ第七子。㊦ 村立神話では、同神について「マカナス。五歳で死す。不詳。」と語る(同上)。○ma:dzi-mara 女神名。この神歌 fusa の主人公。母神マダマが生んだ第八子。同神については前出。㊦ 村立神話では、同神について「五歳で死す。機織りの神。」と語る。○ti-masarja: 「手勝る者」。手の器用な者。機織りに秀でた娘。○uru:ju:ru:ji: 「下ろし下ろして」。次々に産んで。○mti-tiga: 満ちると。○tatami 「畳み」。動詞 tatam (畳む) の連用形。畳ん(で)。○wa:tji 動詞 wa:si (終わる) の連用形。終え(て)。終わっ(て)。

34 ma:dzi-mara-ja jarakunu	34 マーズマラは 器用な 者が
ti-masarja-ja jarakunu	手の 勝れた 者は 器用な 者が
35 tuim nunu: tsimi-bam	35 十読み 布 (の糸を) 紡いでも
jum tarau tsimi-bam	読んで 足りた (糸を) 紡いでも
36 mijutu nunu tati-ti-ja	36 夫婦 布 (の縦糸) を 立てては
awasi nunu tati-ti-ja	裕の 布 (の縦糸) を 立てては
37 pitui ui tara:-da-jo	37 一日 足りないでよ
sikama ui tara:-da-jo	一昼 足りないでよ
38 mijutu nunu urjatsimi	38 夫婦 布 織り集めて
awasi nunu sijatsimi	裕の 布 し集めて
39 urja:tsimi-di-gara-ja-jo	39 織り集めてからは
fija:tsimi-di-gara-ja-jo	し集めてからは
40 futai-kin nurjatsimi	40 二重着を 縫い集めて

	awasi-kin fįjatsimi	裕着を し集めて
41	nurjatsimi-di-gara-ja-jo fįjatsimi-di-gara-ja-jo	41 縫い集めてからは し集めてからは
42	gai-ga tįibi atsü-jo magi-ga tįibi atsü-jo	42 櫃の 底に 仕舞ってよ 大箱の 底に 仕舞ってよ
43	sımudzi ata maba-kara fįgama ata magi-nusa	43 下地の 遠い 真湾から 洲鎌の 遠い 大主は
44	pısara kara kara-nu-jo nijaku nusı nusı-nu-jo	44 平良から からのよ 宮古の 主 主がよ
45	ma:dzı-mara-ja jara-kunu ti-masarja-ja jara-kunu	45 マーズマラは 器用な 者が 手の 優れた 者は 器用な 者が
46	kau-ga-nida maba-kara įzi-ga-nida magi-nusa	46 買いに 来たのか 遠い 真湾から 買い入れに 来たのか 大主は
47	gai-ga futa utfagi-jo magi-ga futa utfagi-jo	47 櫃の 蓋 押し開けてよ 大箱の 蓋 押し開けてよ
48	futai kin idafı-jo awasi kin idafı-jo	48 二重着を 取り出してよ 裕着を 取り出してよ
49	ida kau-ti kau-ti-ja pıru kau-ti kau-ti-ja	49 出して 買って 買っては 広げて 買って 買っては
50	kau-di-gara: jurusi-jo įzi-di-gara: kukuru-jo	50 買ってからは 私の 自由だよ。 買い入れてからは 私の 自在だよ。

〔語注〕○jaraku 柔らかい手先の持ち主、あるいは手先が器用な娘の意であろう。㊦ 稲村の前掲書には、ここは「やれこの」とあり、「やれこの人がということで、これから説き起こそうとする時の言葉である」と説明する。○tuim 十読み(の)。tu: (十) + jum (読み)。jum は布糸を数える単位。一反の布を織るのに「十読み」の糸が必要だという。○nunu: 布を。nunu (布) + u (を)。○tsimi 動詞 tsim (紡ぐ) の連用形。紡い(で)。○-bam 副助詞。～も。○jum tarau 「読み足りた」。一反の布を織るのに必要な数の～。○mijutu nunu 「夫婦布」。二枚重ねの布。裕。○tati-ti-ja 「立てては」。織機に縦糸を何十本も張っては。○awasi nunu 「合わせ布」。裕。mijutu nunu の対句。○pıtuı uı tara:-da 「一日織り足らずに」。一日足らずで織り上げて。○sıkama uı tara:-da 「一昼織り足らずに」。一昼足らずで織り上げて。○urjatsimi 織り集めて。動詞 uı (織る) の連用形 uri + 動詞 atsimi (集める) の連用形 atsimi。○fįjatsimi 「し集めて」。織り集めて。fį は動詞 sı: (する) の連用形。-j はわたり音。○futai-kin 「二重着物」。裕。○nurjatsimi 縫い集めて。○awasi-kin 「合わせ着物」。裕。futai-kin の対語。○gai 着物の保管箱。櫃。○-ga 格助詞。～の。○tįibi ①後ろ。

後方。背後。②尻。けつ。臀部。③底。底部。奥部。ここでは③。○**atsiū** 仕舞って。大切に保管して。○**magi**「大きな(箱)」。大箱。gaiの対語。○**simudzī** 地名。かつての下地間切。今の宮古島市下地地方。○**ata** 遠方の～。あるいは、辺りの～。ここでは前者に取った。○**maba**「真湾」。ここでは、今の与那覇湾沿いの村の意であろう。○**figama** 地名。かつての下地間切の一集落。今の宮古島市下地字洲鎌。○**magi-nusa** 大主は。-nusaは名詞 *nusi* (主) + 副助詞 *a* (～は) であろう。○**pisara** 地名。宮古の近世期および旧藩時代には蔵元(政治の府)が置かれて行政の中心であった。今の宮古島市平良の市街地の一部。○**onijaku nusi** 宮古の主。宮古を治めた首長の意であろう。「にやく」は「にゃーく」「みゃーく」ともいう。○**kau-ga-nida** 難解語。ここでは、前後の文脈から判断して、買いに来たのかと仮訳を当てた。○**iži-ga-nida** *kau-ga-nida*の対句。○**utfagi** 動詞 *utsi* (打つ)の連用形 *utfi* + 動詞 *aki* (開ける)の連用形 *aki*。押し上げて。○**idafi** 出して。取り出して。○**ida kau-ti kau-ti-ja** 取り出して、買い占めては。○**piru kau-ti kau-ti-ja** 広げて、買い占めては。○**kau-di-gara** : 買い取ってからは。お金を支払ってからは。○**jurusi**「許す」。「誰のものでもない、我が物だから、自由に扱って良い」のニュアンスを含む。ここでは「自由だ」の仮訳を当てた。○**iži-di-gara** : 「入れてからは」。買い入れてからは。○**kukuru**「心」。「その心は、布をどう扱うか、私の自由自在だ」のニュアンスを含む。ここでは「自在だ」の仮訳を当てた。

51	<i>ma-mmjuki-di mju:ri-ba-jo</i>	51	真胸に あてて 見るとよ
	<i>ma-fugjuki-di mju:ri-ba-jo</i>		真首に あてて 見るとよ
52	<i>amai kagisa-nna-jo</i>	52	あまりの 美しさによ
	<i>dukī-nu kagisa-nna-jo</i>		驚く ほどの 美しさによ
53	<i>ui-ŋ-gami tuju-ti-ja</i>	53	ウイまで (名声が) 響いては
	<i>nakabi-gami tuju-ti-ja</i>		ナカビまで (名声が) 響いては
54	<i>niīzja-gami tuju-ti-ja</i>	54	ニズヤまで (名声が) 響いては
	<i>kanaja-gami tuju-ti-ja</i>		カナヤまで (名声が) 響いては
55	<i>ni-sīma-gami tuju-ti-ja</i>	55	ニスマまで (名声が) 響いては
	<i>fīra-dzī-gami tuju-ti-ja</i>		シラズまで (名声が) 響いては
56	<i>ba-nu nafai mma-ja-jo</i>	56	我を 生んだ 母はよ
	<i>mmjoritai mma-ja-jo</i>		(私が) 産まれた 母はよ
57	<i>sīrudiruma nafai-jo</i>	57	優れて 生んで くれたよ。
	<i>pīrudiruma nafai-jo</i>		勝って 生んで くれたよ。
58	<i>sīrudiruma nasitfa:-ja</i>	58	優れて 生んだのは
	<i>pīrudiruma nasitfa:-ja</i>		勝って 生んだのは
59	<i>nara kukuru mari-tai</i>	59	自らの 心で 産まれたのだ。
	<i>kīmu-kukuru mari-tai</i>		肝心で 産まれたのだ。

う。その降臨の目的は、例えばその祖神の一人 *ma:dzi-mara* にとっては、神歌 *fusa* を司る祖神 *fusa-nu-nusi* に自分の *fusa* を村人たちの前で歌ってもらいたいためである。一方、祖神 *fusa-nu-nusi* は、「自分の名が *matsi-miga* であること」を名乗った上で、「狩俣の村立の神 *mma-nu-kam* (母なる神) から神歌 *fusa* の歌い手としての認可を受けたこと」を明らかにし、「*mma-nu-kam* のお伴をして、数々の神歌 *fusa* を歌って祖神 *uja:n* たちを輪舞させてから、一緒に神々の領分 *ni-sima* へ帰ろう」と歌う。もともと、現実には神歌 *fusa* の歌い手は祖神 *fusa-nu-nusi* ではなく、同神に仕える同名の神女 *fusa-nu-nusi* のペアであるが——。この構図をきちんと理解することが、神女 *fusa-nu-nusi* のペアが第二回 *idasī-kam* の *juna:n* の場面で歌う一連の *fusa* を解きほぐす鍵となろう。

さて、神々のストーリーでは、この *fusa* の主人公 *ma:dzi-mara* の出自とその優れた織り手としての名声を称えて歌う。

- ①母神 *ma-dama* (真玉) が生んだ七人の子のうち、末娘 *ma:dzi-mara* が機織りに秀でていた。
- ②*ma:dzi-mara* が織った布を求めて下地や平良から多くの買い手がやってきた。
- ③買い手がその入手した布を胸や首にあてて、あまりの美しさに驚嘆した。
- ④*ma:dzi-mara* の名声が、天上界、地上界、地下界、そして上記 *ni-sima* の神々の耳にまで届いた。
- ⑤世間からは、*ma:dzi-mara* だけでなく、同神を産み育てた両親も称えられた。

宮古の女性たちにとって機織りが大きな仕事であった時代、狩俣に *ma:dzi-mara* という機織りに秀でた娘がいたことをこの *fusa* は、祖神 *uja:n* たちから村人たちへのお告げ (神託) として、祖神祭 *uja:n* の舞台でとりたてて歌うのであろう。*fusa* の内容は、遡れば祖神 *uja:n* たちがその昔、村人の一員として生きていた頃の出来事であり、それは村の歴史の中で浄化され、今や神々の世界での話、つまり神話に昇華してウァーン祭祀の中で歌われている。*ma:dzi-mara* の *fusa* は、今日その内容の是非はともかく、文学としては狩俣の地に華開いた長編叙事詩の一編として理解して良からう。

一方、*ma:dzi-mara* の *fusa* には宮古の主に近世社会が色濃く反映されているようにも見えるが、その辺のことは今後の研究課題としたい。

祖神 *ma:dzi-mara* の機織りの件については、他に前述の拝所 *upu-gufu-mutu* の *natsi-bu:i* (夏祭) の時にも、男性氏子たちが神歌 *ni:ra:gu* (蝶の舞い歌) の一編として歌うが、それについては稲村賢敷先生その他各氏の先行研究を参照されたい。

【採集】 この *ma:dzi-mara* の *fusa* は 1970 年代前半、祖神祭 *uja:n* の第二回 *idasī-kam* の時、その祭場の一つである *upu-gufu-mutu* の中庭で神女たちが輪舞するのを筆者が傍で見学しながらテープに録音した。そして後日、同テープをもとに歌詞を文字化した。

【関連文献】 ここに取り上げた *ma:dzi-mara* の *fusa* をはじめ、狩俣の神歌の大半には定訳がない。ここでは狩俣の神歌を理解するための文献として、次の研究書を掲げておく。なお、論文は除いてある。

- ①稲村賢敷著『宮古島旧記並史歌集解』 (1962 年、琉球文教図書株式会社)。
- ②外間守善・新里幸昭著『宮古島の神歌』 (1972 年、三一書房)。
- ③外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』 (1978 年、角川書店)。
- ④平良市史編さん委員会編『平良市史第七巻資料編 5 民俗・歌謡』 (1987 年、平良市教育委員会)。

- ⑤内田順子著『宮古島狩俣の神歌——その継承と創成』（2000年、思文閣出版）。
- ⑥新里幸昭著『宮古の歌謡 付・宮古歌謡語辞典』（2003年、沖縄タイムス社）。
- ⑦新里幸昭著『宮古歌謡の研究』（2005年、私家本）。
- ⑧新里幸昭著『宮古歌謡の研究 続1』（2012年、私家本）。
- ⑨居駒永幸著『歌の原初へ——宮古島狩俣の神歌と神話』（2014年、おうふう）。
- ⑩奥濱幸子著『祖神物語 琉球孤 宮古島 狩俣 魂の世界』（2016年、出版社 Mugen）。

